

韓国忠州市で開催された国際ワークショップでの差異の受容過程とその成果の検証

- その2 議論の過程で生じた差異の考察 (チーム2を事例として) -

準会員○江藤 紅音*1 正会員 加藤 浩司*2 正会員 辻原万規彦*3
正会員 郭 東潤*4 同 北原 理雄*5 同 菅沼 大資*6

7. 都市計画-9. 教育と資格 都市計画

ワークショップ, ムハク市場, 日韓, コミュニケーション, 差異

1. はじめに

その1を受ける本報では、国際ワークショップ(以下WS)における議論の過程で生じた差異の考察として、チーム内の議論に見られた考え方の違いを提示する。その1で挙げた通り今回のWSは6つのチームに分かれて活動を行ったが、本報で取り上げるのは筆者1、筆者4、筆者5、筆者6が所属したチーム2の動きである。このうち、筆者6がチーム2の日本人学生リーダー、筆者4及び筆者5がチューターを務めた。

本報では、まずチーム2の概要として対象地やメンバー構成、そしてWSにおける動きと提案内容をまとめる。その後、筆者らのメモと記憶をもとに、議論の過程で生じた主な差異を提示した上で、差異が生じた原因を考察する。

なお、ここでいう差異とは、その大小は問わず、議論を交わす中で表面化した意見の相違のことを指す。

2. チーム2の概要

2.1 対象地の概要

チーム2の対象地は、忠州川の西側に位置するムハク市場である。ムハク市場は、それまで五日市だったものが1992年に常設化された在来市場で、全体を覆うアーケードが特徴的である。180を超える店舗のうち70%近くが食品関係、その他は日用品や衣類などを取り扱っている¹⁾(写真1)。

忠州大学の事前調査によると、利用者は高齢者と女性が多く、年齢層は40代から80代、主な交通手段はバスや徒歩となっている。また、ムハク市場の南東に比較的新しい商店や大型スーパーがあるため、若者はそちらを利用していることが分かっている。なお、

この事前調査については後述する。

WS中に行った現地調査では、アーケードによって市場内が暗くなることや空気の循環が悪くなることなどを問題視する声が聞かれた²⁾。また、市場内部に駐車場があることによる車両進入や、通過交通による危険性も指摘された(写真2)。一方、車両進入禁止となっている一部の通りでは店の前の通路に商品が陳列されており、そこで店主と利用客が会話を楽しむ風景も見られ、市場が交流の場となっていることも窺えた。

2.2 チームの構成(表1)

日本人学生については、専門は異なる³⁾が、物的な環境に興味を持ちつつも総合的に環境を捉えようとする点で共通項が見られた(ハードソフト一体型)。それに対し、韓国人学生は、物的な環境に強い関心を持っていた(ハード重視型)。なお、チーム2において大学院生は千葉大学の学生のみであった。



写真1 ムハク市場



写真2 市場内の駐車場

表1 チーム2のメンバー構成

No.	国	所属	研究室	学年	性別
1	日本	千葉大学大学院	都市計画系	M1	男
2		工学研究科建築・都市科学専攻	建築計画系	M1	男
3		熊本県立大学 環境共生学部居住環境学科	環境工学系	B4	女
4		熊本大学 工学部建築学科	所属なし (歴史意匠系)	B3	女
5	韓国	忠州大学	未確認	B5	男
6		建設交通学部建築学科	未確認	B5	男
7			未確認	B4	女

日程	作業内容	差異の内容
事前準備期間	【メール】 チーム発表後、メールを通して最初の挨拶。	①最初の着眼点 何に着眼目して提案を行っていくか。 日本人学生…現地調査を通して在来市場ならではの魅力を発見し、それを伸ばしていきたい。【魅力発信型】 韓国人学生…在来市場は問題点が多いので、それらを改善していく方が重要。【問題改善型】 原因 事前の取り組み方の差、情報量の差 対応：問題改善型で進めることに
	【HP】 韓国側が準備したWS用のホームページ上で、日韓学生同士の挨拶。敷地情報を共有。	
	【dropbox】 dropboxを用いて、日本人学生内で、事前に収集した情報を共有。	
	【skype】 Skypeのチャット機能を用いて、提案の方向性やアウトプットの方法など、今後の進め方を議論。提案のイメージや敷地情報を共有。	
1日目 (8/10)	【千葉組入寮】 千葉大学と忠州大学の学生が合流。	②アウトプットの方法 提案内容をどうするか、どう示すか。 日本人学生…実際に地域の人々を行うイベントを企画し、得られた結果を報告して将来的なビジョンを段階的に示す。【地域密着型】 韓国人学生…敷地内に建物を設計し、図面や模型を用いてその計画案を示す。【建築型】 原因 受けてきた教育の差、興味の対象の差 対応：現地で考えていくことに
	【方向性の検討】 事前話し合いの内容の確認、今後の進め方などの検討。	
	【対象地視察】 対象地の視察。周辺の散策。	
2日目 (8/11)	【九州組入寮】 九州の学生が合流。メンバー全員揃う。	③周辺環境の取り込み方 対象地外の要素を提案に取り込むか。 日本人学生…対象地の隣の川とのつながりを考慮し、人の流れを生み出したい。 韓国人学生…対象地外のものを使わず、対象地内で解決する。 原因 受けてきた教育の差、実践経験の差 対応：対象地内で考えることに
	【開会セレモニー・チューターレクチャー】 開会セレモニー、ガイダンス、チーム紹介及びチューターによるレクチャー（自身の研究内容等）。	
	【方向性の確認】 これまでの流れの確認。提案の方向性について議論。	
	【アンケート・ヒアリング項目の検討】 翌日行うアンケート調査及びヒアリングの項目の検討。	
3日目 (8/12)	【対象地調査】 対象地調査（記録撮影、実測、空店舗プロットなど）、利用者・店主・市場オーナーへのヒアリング・アンケート調査。	④イベントのターゲット 市場で行うイベントのターゲットは誰か。 大学院生…こども向けのイベントで若者を市場に呼び込む。 他の日本人学生…市場の高齢者自身が楽しめるものを。 原因 受けてきた教育の差、知識や経験の差 対応：こどもと高齢者が一緒に楽しめるイベントに。 意見に合わせて新しい提案へつなぐ
	【調査結果分析】 ヒアリング結果まとめ（KJ法）、アンケート集計、調査結果分析。	
	【問題点の整理】 問題点を整理し、3つに分類。（駐車場、アーケード、2階空店舗）	
	【中間発表準備】 中間発表用プレゼンボードの作成。	
	【中間発表】 チームリーダーが調査結果と提案の方向性を発表。発表後、質疑応答。	
4日目 (8/13)	【方向性の再検討】 中間発表でのアドバイスなどの再確認。提案の方向性の再検討。	⑤駐車場の使い方 今後、駐車場をどう使っていくか。 日本人学生…駐車場として使う一方で、時には広場としても利用できる可変的なものに。 韓国人学生…用途は1つに決めるべき。 原因 受けてきた教育の差、国の違い 対応：公園の機能のみの場所へ、対象地外にある駐車場を利用。 互いの違いを受け入れ合える関係に
	【提案内容の検討】 問題解決のための具体策を議論。 ・駐車場：休憩所+イベントスペースを持つ公園へ。 ・アーケード：川からの風通しを考慮して、隣接する建物の一部をデッキやテラスに。 ・2階空店舗：レストランや体験型農場を埋め込む。	
	【最終発表準備】 最終発表用のプレゼンボード、模型、パワーポイントの作成。	
5日目 (8/14)	【最終発表準備】 最終発表に向けた最後の追い込み。	
	【最終発表】 チームリーダーによる最終発表。	
	【全体講評会】 全体講評会 開会セレモニー、修了証書授与。	
6日目	【退寮】 写真や発表資料などのデータの共有の後、参加者全員が退寮。	

図1 WSにおけるチーム2の動き及び議論の中で生じた差異の内容

3. チーム2の動き (図1)

3.1 事前準備期間

事前の話し合いは、主にSkypeを用いて行われた⁴⁾。この段階で、その後の進め方に関する重要な議論が交わされた。

日韓別の事前取り組みとして、日本人学生は商店街や市場活性化及びまちづくりなどの事例、並びに過去に行ったWSや商店街活性化プロジェクトなどの情報を収集し、共有した。韓国人学生は、忠州市の在来市場の調査及び分析を事前に行っていた⁵⁾他、その詳細は定かではないが、対象地で演習に取り組んでいた。

3.2 WS期間

期間中は、英語での会話に加えてスケッチやイラストを用いてコミュニケーションを図った。WS後半は詳細を詰めるための議論が十分に行えるよう、パースや断面図などを頻繁に描いてイメージの共有と確実な意志の疎通を心がけた。

4. チーム2の提案 (図2)

提案の主な特徴を示す。

- ① 駐車場を公園化し、定期的にイベントを行う。
- ② 隣接する建物の一部をデッキ・テラス化して風の通り道をつくり、アーケード内の環境改善を図る。
- ③ 2階空店舗にレストランや体験型農場を設ける。

5. 議論の過程で見られた差異

ここでは5項目に着目して差異を述べる。図1に差異の内容と対応並びに原因を、表2及び表3に各項目に関する発言とその発言者を、それぞれまとめた。

①最初の着眼点②アウトプットの方法③周辺環境の取り込み方 においては、議論の結果どちらかの意見を選択、またはその場合は保留にしておく対応となったが、④イベントのターゲット⑤駐車場の使い方 では互いの意見を取り入れ、新たな提案につなぐ対応がなされた。なお、議論は学生中心で行われ、要所要所でチューターがアドバイスを行った。

①最初の着眼点

【内容】日本人学生は在来市場の持つ魅力を伸ばしていきたい（魅力発信型）と伝えた。一方の韓国学生は、在来市場の問題点の多さを指摘し、それら問題を改善していく方向性（問題改善型）を提案した。

【原因】3.1の通り、事前の取り組み方には日韓の学生で違いがあった。日本人学生は、住民参加型のまち



図2 提案の内容（マスタープラン）

表2 議論①②③に見られた差異の詳細（【 】は発言者を示し、番号は表1左のNo.に対応）

①最初の着眼点	②アウトプットの方法	③周辺環境の取り込み方
<ul style="list-style-type: none"> ・大型スーパーに客を奪われても伝統的な市場の良いところは残っているはず【1】 ・住民にヒアリングを行ったら見えてきそう【3】 ・そういった良さを継承していく提案にしたい【1】 ・“人”がキーワードになる市場になれば【3】【4】 ・問題点を解決していく方が良いのでは【7】 ・ここは問題点が多い空間【7】 ・問題点…アーケード、駐車場不足、空き店舗【7】 ・公共交通機関の状態が劣悪【6】 ・問題点を解決すれば自然と長所も見えるはず【7】 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画型とイベント型の2種類がある【1】【2】 ・イベント型は実際に行うのでインパクトがある【4】 ・住民と作ったランタンを置いて商店街に人を誘導するWSも過去にあった【2】 → その時のWSの写真を出す(右欄写真) ・市場の魅力を集めてマップを作るなど【2】 ・イベントは実質的な効果があるか？【5】 → 建築を提案するイメージ図を出す(右欄図) ・私たちは建築家として新しい何かをつくるべき【7】 ・建築の提案も必要だがそれだけではないはず【2】 	<ul style="list-style-type: none"> ・近くにある川が何かに使えそう【1】 ・対岸の市場からの人の流れを作り出せないか【2】 ・川と市場をつなぐ道に何か仕掛けを作ってみては【4】 ・川は対象地に含まれないため利用しない方がよい【5】



づくり事例などを多く収集していたことから、住民と一緒に地域の魅力を引き出していくような提案を思い描いていた。一方、実際の敷地で既に演習に取り組んだ経験を持つ韓国学生は、問題点が多い現実を重く受け止めていた。このように、事前の取り組みや情報量の差によって、最初の着眼点に違いが見られた。

②アウトプットの方法

【内容】アウトプットに関して、日本人学生が地域密着型を想定していたのに対し、韓国学生は建物を設計する建築型を想定していた(表2)。これらの違いは、提案のイメージ像に明確に現れた。

【原因】この差異は、同じ課題に取り組む際に、これまで受けてきた教育や興味の対象によってアプローチの仕方が異なることを表していると言える。ハードソフト一体型は地域住民と共に段階的に解いていくという意識から地域密着型に、ハード重視型では「建築家として何かをつくる(表2)」という意識から建築型に、それぞれ分かれたのではないと思われる。

③周辺環境の取り込み方

【内容】大学院生は、対象地の隣を流れる川との関連性を考慮すれば、新しい人の流れを生み出すことができるのではないかと考えた。これに対して韓国学生は、川は自分たちの対象地に含まれないことを理由に挙げ、それに頼ることは好ましくないとした。

【原因】周辺環境へ注意を向けたのは大学院生2名であり、最初の段階では日本人学生の他2名はそのような視点は持っていなかった。これまでの実践経験の差が、このような着眼点の違いとして現れたのではないと思われる。また、韓国学生は基本的に敷地内で解決していくべきという考えを持っていた。こちらも、前述したハード重視型の意識の現れだと言えるだろう。

④イベントのターゲット

【内容】市場内で行うイベントの内容を議論する中で、大学院生はこどもをターゲットにして若者を市場へ呼び込む意見を出した。対して、他の日本人学生は、高齢者自身が楽しめるイベントを挙げた。この結果、双方の意見を合わせて、こどもと高齢者が共に参加できるイベント（フードフェスティバル）が提案された。

【原因】大学院生はこどもを対象としたプロジェクト事例を多数知っており、他方は高齢者の多い商店街活性化プロジェクトに取り組んだ経験があった。このように知識や経験による差異であったが、それらを組み合わせる新しい提案につなげた点が、前述した差異の対応とは異なる。WS 後半になるにつれ、互いの意見を尊重する姿勢が多く見られるようになっていった。

⑤駐車場の使い方

【内容】提案の要となる市場内に位置する駐車場の活用方法について、日本人学生は、駐車場として利用する一方で、それ以外の時間は公園としても利用できるような可変的な場所としての計画を提案した。これに対して韓国人学生は、韓国人の認識の仕方⁶⁾を考慮するとそういった可変的な使い方はできないため、機能は1つに決めるべきとした。議論の結果、駐車場の機能をなくし、公園としてのみ使っていく提案にまとまった。代わりに、対象地の近隣に新設される大型娯楽施設の駐車場を利用することとなった。

表3 議論④⑤に見られた差異の詳細
【】は発言者を示し、番号は表1左のNo.に対応

④イベントのターゲット	⑤駐車場(以下P)の使い方
<ul style="list-style-type: none"> ・近くに小学校がある【2】 ・そのこどもたちを対象にしては【2】 ・保護者も同伴することになり 市場に若者が増えそう【1】 ・そこに住む高齢者自身が 楽しめるのもいいのでは【4】 ・外部から人を呼び込むのは大変【4】 ・みんなでお茶会など【3】 ・食品を扱う店が多いので 食べ物が利用できないか【1】 ・市場内の食品を使って こどもたちが料理体験をするなど【2】 ・高齢者がそれを教えるようにしては【4】 	<ul style="list-style-type: none"> ・Pのままではもったいない【1】 ・Pをなくすと困る人がいるはず【2】 ・突然ではなく徐々に 市場から車をなくす計画を【1】 ・Pの機能は残しつつ 公園としても使えるように【2】 ・韓国ではそのような使い方はしない【5】 ・人々の認識を変えることは難しい【5】【7】 ・機能は1つに決めるべき【5】【6】【7】 ・公園のみの機能にする？【1】【2】 ・Pはなくしてしまってもいいのか【3】【4】 ・近隣に大規模なP計画の予定がある【5】 ・それを利用するようにしては【5】【6】

*1: 熊本大学工学部建築学科 学部生
*2: 有明工業高等専門学校建築学科 准教授・博士(工学)
*3: 熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士(工学)
*4: 千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻 助教・博士(工学)
*5: 千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻 教授・工博
*6: 千葉大学大学院工学研究科建築・都市科学専攻 博士前期課程

【原因】この差異の原因は、日韓の考え方の違いによっても考えられるが、むしろ各々が受けてきた教育の違いによるのではないかとと思われる。注目できるのは、議論の結果、対象地外の駐車場を利用することになった点である。②の通り、当初、韓国人学生は対象地内ですべて解決するべきという考え方だった。しかし、コミュニケーションを重ねるうちに互いの違いを理解し合えるようになり、異なる意見を受け入れて新しい提案を生み出せるようになっていったと言えるだろう。

6. まとめ

チーム2の議論で見られた差異について考察を行った結果、国だけでなく各々のバックグラウンドの違いにより多様な差異が生じることが分かった。例えば、本報で取り上げた5つは、これまでの教育や経験、興味の違いなどによるものであったが、その他に男女の違いや普段の生活環境の違いによるものも見られた。

しかし、チーム2ではそれらによって議論や作業が停滞した印象はないというのが、取り組んだ学生らの捉え方である。むしろWS 後半では、互いの影響を受けて新しい提案が生まれており、差異によって提案自体に多角的な視点を持たせることができたと言える。

他方、全体を見ると、韓国側のスクラップ&ビルドの考え方が顕著に見られたチームもあったようだ。互いの意見をどう受け入れていくかが、全体を通しての課題であったと言え、それらの差異を乗り越えることができたかどうかは、チームによって異なっていた。

謝辞 本稿をまとめるにあたって、武藤真守さん、明石英里さんをはじめ、チーム2のメンバーの皆様には大変お世話になりました。また、今回のWSに参加された全ての皆様へ、この場をお借りしまして深く感謝の意を表します。

補注

- 1) WSで配布された冊子中の「Theme of International Urban and Architectural Design Workshop 2011」(Lee 准教授の講演資料)より。
- 2) 市場利用者・店主・オーナーに行ったヒアリング及びアンケートより。
- 3) No.4の学生は学部3年であるため研究室には所属していない。有明高専在学時は歴史意匠系の研究室に所属。現在は都市計画系に興味を持つ。
- 4) 試行錯誤を重ねるうちに、英語を介さず日本語と韓国語で会話を行う方が誤解も生じにくく、比較的円滑に意思疎通が行えることが判明した。そのためSkypeでは、英語に加え翻訳サイトを活用した日本語と韓国語での会話が増えられた。WS期間中も度々この手法が使用された。
- 5) WSで配布されたリーフレットより。
- 6) 韓国人学生によると、韓国の人々は1度駐車場と認識すると以降はその認識のままで、それを後から変えることは難しいとのことだった。

Undergraduate Student, Kumamoto University
Assoc. Prof., Ariake National College of Technology, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
Assistant Prof., Graduate School of Engineering, Chiba University, Dr. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Chiba University, Dr. Eng.
Graduate Student, Graduate School of Engineering, Chiba University